

モノ・場所・人から考える嗜好品研究のこれから

立命館大学食マネジメント学部准教授 安井 大輔

嗜好品研究は、嗜好品と人間がどのように相互に関わり合っているのかを探求する。「生存にとっての必需品であるとはいいたい」とその定義にあるように、嗜好品自体はあってもなくてもただちに困るものではない。しかし、ないと寂しい、物足りないと感じるように、嗜好品があるからこそ私たちの人生に潤いがあるのも真実であり、その意味で嗜好品が人間に生きる喜びをもたらしていると言っても過言ではない。高田公理によると、嗜好品に似た類語を探ってみても、そこに楽しみの要素がある言葉は日本語以外では、ドイツ語のGenuss-Mittelのみで、「遊びと楽しみの要素をもつ飲食物」という意味を持つ漢字の用語は日本語独自のものようだ。この嗜好品という言葉は、明治時代に日本の文豪・森鷗外の創作したものだが、さまざまな対象を「人に楽しみをもたらしてくれるもの」という同一のカテゴリーとして包含することを可能にした拡張性の高い概念となっている（高田・嗜好品文化研究会 2008）。

嗜好品は毒にも薬にもなりえ、ときに酩酊ときに覚醒をもたらす。多くの嗜好品は植物由来であり生態系の一部を構成するとともに、それを嗜むことは人間の集団ごとに共有される文化でもある。嗜好品を摂取すると、身体を介して社会や自然へと自己が開放され、他者とのつながりが生み出される。嗜好品のもたらす人類の「喜び」を追求するには、自然（生態系）と社会（文化）の双方を視野に入れなければならない。それゆえ嗜好品のもつ多面的な性質をとらえるには、既存の学問体

系に収まらない学際的アプローチが求められる。既存の分類に当てはまらない嗜好品という立場から世界を見ることで、これまでの学問の体系自体を問い返すことにつながるかもしれない。多種多様な専門家が交錯する「嗜好品」という魅力的な異分野交流のアリーナを設定したところに、嗜好品文化研究会の大きな貢献があった。

「嗜好品（文化研究）の未来」を論じる特集において、本稿では、今後取り組まれるべき嗜好品研究の問題群を提示してみる。モノ、場所および、それらと人との関係を対象とした人文社会科学分野の研究動向を踏まえ、これからの嗜好品研究の素描を試みたい。

■ モノ研究と嗜好品

人類学には、衣食住など生活のなかのモノと人との関係をテーマとする物質文化研究という領域がある。人類学・社会学ではマイナーな領域とされてきたが、この分野における近年の展開は他分野からも注目を集めており、嗜好品文化研究にも資するところがあるように思われる。本節では、モノをめぐる研究動向を追いながら、嗜好品研究への応用を考えたい。

まず、モノ研究の大きな前提として、「モノから考える」という視点を指摘しておきたい。こうした視点が提起されるのは、まず何よりも近代の人間中心主義とその克服が求められているからだ。人間中心主義とは、人間の側から事物を判断することだが、ひいてはもっ

とも進化した存在として人間は自然環境を利用する権利を有するという思想の背景となり、自然破壊や環境問題をひきおこしてきた根本的な誤りだったともされる。これを受けて、近年の人文科学では全体として、人間を脱中心化する議論が進んでいるが、そのなかでも有力なものがマテリアリティ materiality (物質性) に注目する議論である⁽¹⁾。

人類学の歴史をたどると、最初期の文化人類学は未知の世界に出かけ、収集した民俗・民族資料を整理し博物館や資料館に展示することが中心だった。その当時は物質文化研究こそが人類学だったといってもいい。しかしその後、人類学者たちの関心は、フィールドで出会う個別具体的なモノそれ自体よりも、より抽象的なシステムや関係性へとシフトしていった。フィールドで遭遇した事物や事実から、抽象化された社会関係や文化的コード、記号や表象のシステムを分析・考察することが人類学の中心となっていった。こうした表象主義によって、人類学が社会や文化についての深い理解をもたらしてきたことは間違いない。ただし象徴に基づく解釈において、モノは当該社会のさまざまな社会関係を反映する記号やテキストとして扱われることとなり、モノ自体への関心(たとえば硬さ、大きさ、味など)は後景に退けられていた。

表象主義・象徴主義の視点は、あくまでも人間の側から見た世界のとらえ方である。日本の人類学者たちによる新しいモノ研究の論文集『ものの人類学』(床呂・河合 2011)において、編者の床呂郁哉は、「人間(とその社会・文化)」という主体を中心とした問題設定においては、モノは「主体によって統御される従属的で従順な客体としての位置に置かれて」しまうと主張する。人間は自らの意思でモノを作り、選び、使用している。そのように感じることは自然な思考の流れだが、そうしたモノの利用があまりにも普通で日常的な行為であるがゆえに、モノも人間に影響する

という側面が見失われがちである。人類学者たちは「もの」たちがそれ自体のうちに孕む能動性や主体性、のっぴきならない力やポテンシャル」に注目することを訴え、そこに従来の人間中心主義を乗り越える方途を見出そうとしている。『ものの人類学』とその続編『ものの人類学2』(床呂・河合 2019)は既存の物質文化研究を乗り越える試みとして編まれているが、これらは物質文化研究について投げかけられてきた以下のような指摘に答えようとしている。

「もの」ないし物質文化の研究は、ともすると各地の「もの」の並列的(paradigmatic)な事例の紹介で終わりがちであるということ、また、博物誌(カタログ?)的に各地の各種の「もの」に関する民族誌的記述が羅列されるのはいいが、それが人類学の議論について、果たしてどのような研究上の意味や意義を持っているのかわかりにくい。(床呂・河合 2011: 8)

嗜好品文化の研究についてもこのような指摘が当てはまる場所があるかもしれない。世界各地の嗜好品および嗜好品的なものを厚く記述し博物誌・民族誌としてカタログを充実させていくことには十分意義があるが、さらに広く嗜好品研究を展開していくうえでは、研究を現代世界の諸問題と接続していくのも必要だろう。その意味で、表象の意味を解釈するのではないモノ研究を参照することは今後の嗜好品を考える導きの糸となってくれるように思われる。それは自然と人間、社会と人間を対立的にとらえて、いっぽうを客体化してしまう還元主義の超克へとつながる可能性がある。

■ アクターネットワーク理論とアート・エージェンシー

とはいえモノの側から考えることはそう簡

単ではない。人間は木や石になれるわけではないし、建築物の気持ちがわかると例えではなく本気でそう述べている人は正気を疑われてしまうかもしれない。こうした言明のポイントは、人間だけを能動的な主体とする世界観を再考させるところにある。人間の意識を特権化する西洋近代的な人間中心主義を再考して、新たな人とのモノとの関係を見出そうというのである。

社会学や文化人類学では、自ら何かを行うことのできる能力を行為主体性（エージェンシー）と呼び、その概念をめぐって議論が展開されている。従来、エージェンシーは、主体である人間が客体であるモノに対して発するものととらえられてきたが、その主客図式を乗り越えるために産まれたのがアクターネットワーク理論（Actor Network Theory: ANT）である。ANTとは、科学技術社会論の代表的研究者であるブルーノ・ラトゥールやミシェル・カロンらによって提唱された理論だが、その特徴は人間と非-人間のエージェンシーを区別せずすべてを同等のアクターとして扱う点にある（カロン 2006; ラトゥール 2019）。人間の特徴とされている意志や主体性は、もともと人間に兼ね備えられた属性ではなく、人間とモノが織りなす行為（モノの場合は、そのモノが発揮する機能）のネットワークのなかに／を通して存在するととらえられる。ANTにおいては、特定の行為をもたらす人間の「意図」は、人とモノの複雑なハイブリッドなネットワークのなかで事後的に可視化されるものであって、あくまでも行為の結果として考えられるものとなる（ギギ 2011）。

そして、ANTと並び、脱人間中心主義としてあげられる論者に英国の人類学者アルフレッド・ジェルがいる。ジェルはアートの人類的研究において、芸術作品を、それがもつ象徴や記号としての意味を解釈して説明するのではなく、その作品の持つエージェンシーとしての役割に注目する視点を打ち出した。エ

ージェンシーを行使する存在をエージェント、エージェントが働きかける相手をペーシエントと呼ぶ。人がモノに心動かされ行為を触発される。これはモノがエージェントとなりペーシエントとしての人を動かしているという構図になる。すなわち「それは何を表現しているのか」、「いったい何を意味しているのか」という作品の表現する意味を問うのではなく、その作品が「何をする（引き起こす）のか」という作品の果たす作用や働きをとらえるよう態度を変更することになる。ジェルはこのように、芸術作品について、そこに込められた「意味」を説明するのではなく、それを見るものに対して作品が引き起こす畏怖や魅惑や恐怖などさまざまな感情的反応行為の媒介物として見る視点を提唱したのである（床呂・河合 2011）。

あなたは、何らかの芸術作品を前にして、圧倒されるような気分を味わったことはないだろうか。芸術から受けた感情や微妙な感覚を言語化しようとしても何かしっくりこない。作品に付けられているタイトル、製作の経緯や材料などの情報は参考にはなるけれども、あなたの感動を表現してくれるものではない。作品に打たれた私の気持ちはどう表現したらいいのだろうか……。ジェルの研究は、このような言葉では伝えられない経験をとらえる助けとなってくれるかもしれない。作品のキャプションの記述では表されえない畏怖や恐怖などの感情は、作品がエージェントとしてペーシエントたる鑑賞者に働きかけた結果としてもたらされたものだ。思考や認知は人間の内面だけでなく、モノと関わる人の外部でも起きている。ジェルによるアートのエージェンシーの研究は、言語的経験に限定されえない、作品としてのモノのもつ存在感を汲みだすことを可能にする。

ANTやジェルのアート研究は、モノ研究を人間と社会の関係のなかに位置づけなおし、人間の経験としてとらえなおそうという試み

であり、人類学のエピステモロジー（認識論）からオントロジー（存在論）への転換、いわゆる「存在論的転換」（Ontological Turn）の潮流のなかにある。この転換には幅広い研究が含まれているが、モノ研究に即してみるならば、文化ごとに異なるモノの意味づけを、西洋近代に由来する人類学用語で説明するのではなく、モノを通じて人びとにとっての世界のありよう＝世界観を明らかにしようとするという思潮は共通する²⁾。

モノを、人間が意味を与える対象としてではなく、人間に働きかける作用を及ぼす存在としてとらえるとき、人とモノ、主観と客観、文化と自然といった二項対立的な区分が無化され、モノの研究は世界の経験の研究する営みへと転化される（吉田 2017）。

こうした研究動向は、嗜好品研究の未来を考えるうえで大いに参考になる。たとえば、コーヒーという飲み物を考えてみよう。コーヒーにはアラビア特産のコーヒー豆が世界に流通する商品と化していく歴史があり、その過程は人種主義と結びついた西洋による植民地支配とも密接にかかわってきた（たとえば井野瀬 2020, 2021）。これまでの嗜好品文化研究では、世界各地の地域特産物が資本主義の展開にともないグローバル商品として流通・変容していくさまが明らかにされてきた。この枠組みはモノ・嗜好品の商品化および脱／再商品化の問題として社会・経済についての議論を深化させてきたが、いっぽうでこうした議論は自然については必ずしも射程にとらえてきてはいなかったように思われる。少なくとも、物象化論の枠組みにおいては、交換や消費の対象となるモノがもたらされる自然は均一で受動的な存在として描かれてしまう。対して、社会・文化を至上の規定要因として設定しないANTにおいては、人とモノを並置して、新たな自然—社会関係を展開させることが期待されている。嗜好品を単に生産物や商品として扱うだけではなく、生産地

やほかの植物たちとのネットワークをもった生き物として、あるいは人間に働きかけるアクターとして扱えるとすれば、この手法は大きな発展性をもつはずだ³⁾。

コーヒーと並び代表的な嗜好品である茶についても考えてみよう。日本の茶道は芸術として評価されているが、その特色は、単に喫茶する行為そのものにあるのではなく、湯を沸かし、点て、振る舞う儀式行為、茶が振る舞われる茶室、床の間にかかる掛け物、茶碗をはじめとした茶道具などによる空間、そして主によって客がもてなされる時間とがあいまって構成される総合性にある。すでに茶の湯研究には膨大な蓄積があるが、これら総合芸術としての営みについても、ANT的にそれぞれの要素の連環を分析することも可能かもしれない。

私は少年時代に、織部焼の茶碗を初めて目にしたときの驚きを今でも覚えている。織部焼は美濃焼の一種とされる陶器の種類であり、グニャリと全体を歪ませ口縁を反らせて三角や杓形⁴⁾になった非対称的な形状と銅緑釉による緑色の濃淡ある流れる色彩、幾何学模様や市松模様などの絵付けによる斬新な文様が特徴である⁵⁾。展覧会会場で、均衡の取れた調和的な陶器が並ぶなかで、織部焼の斬新で奇抜な形や文様にひととき目を引かれ、「なんだこれは」という大きな衝撃を受けた。心奪われた私は、陶芸教室で、手ひねりであえてゆがませた、食器棚にも入らない器らしきモノを何個も作って親を辟易させるにいった。自己流解釈で焼き上げた茶碗もどきに抹茶を溶いて飲んでみたら、普段は苦い薬の味と思っていた茶がやたらとおいしく感じたものだった。それは子どもの衝動ではあろうが、織部焼が私に働きかけた結果でもある。ごくごく私的な体験でしかないものの、こうしたモノの造形やデザインに心を躍らせた経験のある人は多いのではないかと思う。アート・エージェンシーの議論はそういった感情の起



【図1】織部焼

Grön Oribe. Skoformad. Waraya II.
<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Grön_Oribe_-_ao_Oribe._Skoformad._Waraya_II.jpg>

伏をモノ・嗜好品からの作用として描くことをうながしており、それはもしかすると、民族誌的記述の新しいスタイルになりえるかもしれない。

■ 場所・サードプレイスと嗜好品

人とモノの布置とその関係を見直すため、モノ研究の新しい展開について述べてきた。次に、人とモノが置かれる場所についても紹介してみたい。これは、これまで図と地の関係で、地とされてきたモノを図としてとらえる観点をさらに進め、人とモノの置かれる地とされる「場所」についても前景化しようという意図からである。

ここからはサードプレイスの概念をもとに、嗜好品研究と場所の関係を考えてみたい。サードプレイスとは、アメリカ合衆国の都市社会学者レイ・オルデンバーグが提唱した概念であり、ファーストプレイスである家庭・自宅（生活拠点）、セカンドプレイスである職場や学校（生産拠点）と異なる第三の空間として、個々人の、定期的で自発的で、インフォーマルな楽しみの集いのために場を提供する、さまざまな公共の場所の総称である。自宅と職場・学校を往復する個人が、家庭や仕事の社会的ネットワークから解放される場として、身分、地位や役割などから一時的に解放され精神的な安寧や新たな関係資本を獲得できる

居場所である。その重要な特徴は、誰もが自由に入出りできる中立領域であること、地位や身分から離れた社会的平等性が担保されていること、会話が主な活動であること、利用しやすく便利であること、常連客が存在すること、外見や内装が地味で目立たないこと、遊び心が満ちた雰囲気があること、わが家のような居心地の良さを得られること、とされている（オルデンバーグ 1989=2013）。

かつてはこうしたサードプレイスがコミュニティの形成に寄与し、人と人のつながりや帰属意識を満たしてきた。サードプレイスは、地域のなかで目立たないが多くの人が気軽に利用でき、社会的地位を気にせず交流できることでなじみのある人間関係が構築できる場所として機能していた。しかし、のちに社会環境や人びとのライフスタイルの変化によりサードプレイスは急速に減少・衰退していった。アメリカ合衆国では、サードプレイスを核として地域社会に形成されていたつながりが失われてコミュニティが崩壊した結果として、地域の経済、民主主義、さらには健康や幸福度にまで悪影響があったと指摘されている（パトナム 2000=2006）。

オルデンバーグが例として挙げたパブ、ビアガーデン、カフェといった場所は、主にヨーロッパや第二次世界大戦前のアメリカ合衆国にみられたものであった。また日本の居酒屋や赤提灯は、カウンターが一種の共有空間となり、店主やたまたま隣り合わせた客との会話が楽しめ、特に常連どうしなら自然と他者の会話に加わることができる。こうした特徴から、居酒屋や飲み屋が日本における典型的なサードプレイスと位置付けられることもある（モラスキー 2014）。

サードプレイスとして、公園、書店、理髪店、図書館、雑貨店が言及されることもあるが、多くの研究でカフェ、コーヒーショップ、バーが典型としてあげられるように、サードプレイスとされる場所の多くはコーヒー、酒と

いった嗜好品を提供するような店である。その意味でサードプレイス研究は嗜好品研究とも関連する。実際、西洋近代における市民層の形成と市民革命において、コーヒー、紅茶などの嗜好品とそれを嗜むコーヒーハウス、カフェという場所が近代社会を支える諸制度を育ててきた。これらの嗜好品のある場所が社会変化に果たした大きな役割の提示は、サードプレイスの歴史論として嗜好品研究がなした大きな貢献といえるだろう(小林 2000; シヴェルブシュ 1988; 角山 2017; 臼井 1992)。

ただし、オルデンバーグによる議論は「古き良き時代のアメリカ」へのノスタルジーが強すぎ、そのままでは理論として限界があると指摘されてもいる。たとえば主な活動として会話が挙げられているように、オルデンバーグによる枠組みではサードプレイスは会話による交流の場として設定されている。しかし、会話という直接的なコミュニケーションを重視しすぎると、一人で酒やコーヒー・茶を楽しむという「サードプレイス」における静かな「盛り」や「憩い」をとらえきれない(本柳 2015, 2018; 櫻井 2019)。また、オルデンバーグによるサードプレイス概念のもつ男性中心主義についても厳しい批判が加えられている。地域の交流を好む中高年男性が家族や仕事のしがらみを離れて常連やなじみ客として会話を楽しむという彼のホモソーシャルなモデルからは、女性や高齢者、または交流を好むわけではない人びとが排除されやすい⁶⁾。

こうした点を踏まえて、現在のサードプレイス研究では、オルデンバーグを引用しつつも、対象となる国や地域の文化状況に応じてその概念が研究者により調整されて用いられることが多い。たとえば地域活性振興策としてコミュニティカフェのあり方を研究する小林重人と山田広明は、日本では必ずしも会話を主とした交流型のサードプレイスが求めら

れているわけではないとし、日本のサードプレイスを「集い・交流できる居心地のよい場所」としての交流型と「人を気にしないでいられる場所」としてのマイプレイス型に区分している(小林・山田 2014, 2015; 山田・小林 2016)。そして日本を対象とした多くの研究では、サードプレイスと称される場所がもつばら後者のマイプレイス型であることを前提にした調査・議論が展開されている。

さらに現代的な位相をかながみると、嗜好品は店舗空間を伴わずとも楽しめる。ペットボトルのお茶や缶コーヒーを開けて一息つく。もしくは一本の紙たばこを取り出してシュボツと火をつけ煙を吸いこむ。それだけで不思議と落ち着き、無味無色の空間が自分の「居場所」に変わる。嗜好品は、傍らにあることで人がささやかな幸せ(小確幸)を得るアイテムとなっており、いつでもどこでもパーソナルなテリトリーを形成することを可能とする(藤本 2008, 2019)。こうした嗜好品のある風景(Shikohin scape)の移り変わりを、人類学者のアルジュン・アパデュライのスケープ論⁷⁾になぞらえて、市民社会の公共空間から地域の、そしてパーソナルな居場所を設定する装置へと変遷する歴史過程としてとらえるような研究展開もありえるだろう。

日本でもサードプレイスはさかんに研究されており、地域活性化や社会問題の解決を目的としてサードプレイスを生み出す実践も数多く報告されている。しかしながら、コミュニティカフェのようにサードプレイスの居場所としての役割に言及されることはあっても、そのカフェで何が飲まれているのか、何が食べられているのかは関心の対象になっていない。世界史上におけるコーヒーハウスやカフェとそれらに由来する西洋近代の制度における女性や有色人種など公衆ではないとされた人びとを排除する機軸の分析はすでに研究蓄積がある(中野 2007; 吉田 2008)。いっぽうで、現代のサードプレイスは特定の

人びとに専有されるのではない多様な人びとが集い共存できる場所であることが求められている。さまざまな他者に開放された場所を作るには、照明や空間デザインの設計や分析とともに、そこで何がどのように嗜まれるのか／嗜まれるべきなのかといった嗜好品文化の観点からの研究も有益なように思えるのだがどうだろうか。排他的な社会をほぐすサードプレイスのような場所の重要性が高まるなか、モノ研究の新展開と合わせて、嗜好品との関係についても追及されるべきかもしれない。

■ 縁食と嗜好品

これらモノ・場所を介した人と人の適度な距離を考えるうえで、歴史学の立場から食と農の問題に取り組む藤原辰史の論考はたいへん参考になる。彼の『縁食論』（2020）は、嗜好品のあり方にも示唆を与えてくれるようにも思える。彼の提唱する「縁食」とは、孤食にも共食にもなることのできる柔軟なものとしてされるが、これはどのようなあり方なのだろうか。

現代日本では孤食は否定的に言及されることが多い。特に子どもの孤食は問題視され、親の責任が問われる。そしてともに食卓を囲める家族の絆を取り戻すことがくりかえし唱えられている。しかし、このような批判は家族絶対主義の思考でありいまでは通用しない。日本では1990年代後半から共働き世帯数が専業主婦世帯数を上回り、現在では共働き世帯が専業主婦世帯の2倍になっている^⑧。若い世代は非正規雇用の率も高く、共働き家庭が普通になっているのは生活の必要からでもある。社会的弱者とされる若いシングルマザーや非正規雇用の人びとは、親子でともに食卓を囲む時間をもつこと自体が困難であり、子どもも親も孤食をせざるをえないのである。求められるべきは、専業主婦を前提とした懐古的な家族モデルによる「おかあさんの手料

理」ではなく、長時間労働の是正など社会の側の変化なのだ。

こうした孤食問題に対して、共食が唱えられることも多い。孤独で栄養が偏りがちな孤食ではなく、家族をはじめとした同じ共同体を構成する人びととともに団欒できる食事というわけだ。しかしこの共食もまた、いまでは確実な解決策ではなくなっている。ときに共食も「暴力」にもなりえてしまう。日本の学校給食は、クラス全員が同じ場所（主に教室）で同じ時間に食べる方式であり、共食の典型例といえる。とはいえ子どもの食べるスピードには個人差があり、給食の時間を過ぎてても残すことは許されず、出された料理をすべて食べきよう指導されることもある。そのような場合、給食の時間は苦痛の時間である。給食は「好き嫌いの多い子どもにとっては暴力装置になりうる」のである。

こうした状況を踏まえて、藤原が孤食でもなく共食でもない食形態として提案するのが縁食である。共食と同じもののように思われるかもしれないが両者の違いは人間どうしのつながりの強さにある。共食が食を通じて既存の共同体意識を強めることを目的とするのに対し、縁食は必ずしも共同体を前提とせず、単に同じ空間に居合わせた者どうしがほどほどの距離感でつながりを持つことを示す。

例として「子ども食堂」があげられている。現代日本では、7人に1人の子どもが貧困家庭にあるとされており^⑨、食事の量や栄養が足りない子どもたちが多くいる（阿部ほか2018）。子ども食堂はそのような日本の子どもの貧困対策として注目を集めている。満足に食事を取ることができていない子どもや保護者などに食事を提供する活動であり、おもにNPOや地域住民によって運営されている。藤原は、これらの活動が有している、他人から参加を強要されることなく各々が行きたいと感じた時に行けばよい自由な居場所としての機能に注目し、敷居の低さとそこから生ま

れる緩やかなつながりこそが縁食の特徴であるとし、高く評価している。

本書における「縁食」の縁は縁側の縁でもあり、おやつやたばこ⁽¹⁰⁾を取る場所として、縁側と縁食を重ねて論じてもいる。その特徴は「強制もなく、誰でも入りやすい」ところにある。一人で食べなければならない寂しいときに子ども食堂を訪れた人は、誰かと話しながら食べる。今日話した相手は、明日は食堂に来ないかもしれない。もし寂しいと感じて食堂に行っても、誰ともしゃべる気にならなくなるかもしれない。だが、話すのが同じ相手でなくともまた別の新しい相手がいる。しゃべる気がないならしゃべらなくともよく、周りには子どもを見ていてくれる大人がいるから、その子が食堂でも孤独を感じないように、しかしなぜしゃべらないのか、と干渉せず配慮してくれるだろう。こんなに居心地のよい「ダベり場」は他にはないように思える。子ども食堂に集まる人びとは家族ではなく、よい意味で赤の他人で、毎日顔を合わせるほどの仲ではないからこそ干渉しすぎることがない。だからこそその居心地の良さというものがあるのである。

この縁食という言葉が示そうとしているものと、嗜好品研究が見いだそうとするものは重なり合う。たばこに典型的なように、嗜好品の多くは、一人で嗜むこともできるし、他人に勧めたりもらったりして場を共有することもできる。縁食における食事と同じく、多くの嗜好品も「居心地のよい空間」を味わうためにあるといえる。嗜好品の「人と人をつなぐ」機能はこれまでの研究でよく指摘されてきた。嗜好品というモノを介して人と人がいかにつながるのか、つなぐことができるのか、嗜好品研究の重要なテーマであることは間違いないが、同時に、そのつながりの形態のヴァリエーションはより多様であってもよいように思われる。嗜好品を介したつきあいには、ほどよい距離感が必要であるが、場

合によっては、つながらなさもまた検討されるべき課題となるかもしれない⁽¹¹⁾。

■ 楽しみ研究としての嗜好品研究

最後に今後、嗜好品研究を進めるうえで最も大切なこととして、嗜好品研究は楽しみの研究であることを強調しておきたい。

ここでは、『へうげもの』（講談社）を紹介する⁽¹²⁾。本作は、日本の漫画家・山田芳裕による、古田織部を描いた作品であり、2005年から2017年にかけて漫画雑誌『モーニング』（講談社）にて連載された。古田織部とは、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康に仕えた戦国武将・古田重然の通称だが、千利休に学び茶の湯を大成した茶人・芸術家として知られる（桑田 2010）。先述した織部焼をはじめ、茶道具の製作、建築、作庭などでも才能を発揮し、安土・桃山時代から江戸時代初期にかけて「織部好み」と呼ばれる生活文化の一大潮流をもたらしたこの人物の人生を、史実をもとにしつつも大胆に脚色して描き出している。

特筆すべきは、本作が、茶道具、建築、作庭など「数寄」というキーワードに集約される美の嗜好性をめぐるドラマとして展開される物語であることだ。本作品第1話のタイトルは「第一席 君は“物”のために死ぬるか!？」であり、雑誌連載時には欄外のあらすじ紹介にて「これは『出世』と『物』、2つの【欲】の間で日々葛藤と悶絶を繰り返す戦国武将【古田織部】の物語である」と紹介されている。数寄の名物に異常ともいえる執着を見せ、物欲に身を焦がす織部の葛藤と悶絶はまさにアートのエージェンシーに翻弄される人間の姿そのものだ。

作品の前半では、師である千利休がきわめた「わび」「さび」とは異なる美を求めて苦悩する織部が描かれる。利休の死後、師の理想とした黒を基調とした「わびの美」に代わる価値として、織部がゆがんだ茶碗に見出した

のが「へうげ（ひょうげ）」であった。物語の後半では、ついに己を見出した織部が天下一の茶人として「破格の美」を至高の価値とすべく活躍していくこととなる。「私にはより面白き器こそ最上の物／格式や箔なぞを取っ払うた……／一見のみで腹よじれる器が欲しいのだ」（山田芳裕、2009、『へうげもの』講談社、第九服第九十六席（第9巻96話）、p.193）と自ら語るように、歪んだ茶器を作ることを通して、織部が目指したのは一笑を得ることであった（図2）。織部は自らの生涯を通じて、あらゆる人びとから「一笑」を引き出すことに血道をあげる。

我が道を邁進する織部に最大の敵として立ち上がるのが徳川家康である。数寄の価値を認めない家康と、数寄の体現者である織部は、数々の因縁を経て真っ向から対立することとなる。家康は、人間とは単に知恵のついた猿であるという。好きにさせればいつまた戦乱の世のように互いに傷つけあうかわからないから、清い理念のもとで厳格かつ一元的に管理するしかないという。

このような規制のまなざしは、現在の安全を優先し自由を制限しようとする動きとみることもできるが、私には嗜好品をめぐる禁止・排除の動向とも重なって見える。対する織部は、猿のように好き勝手生きられる自由



〔図2〕ゆがみ器を完成させた古田織部（山田芳裕、2010、『へうげもの』講談社、第十服第七百席（第10巻107話）、p.198）

からこそ、世の中を面白くするもの、楽しく生きていけるようにするものが生まれるだろう、面白さを欠いた世の中に生きる理由などあるのか、と答える。物語では、史実通り、織部は家康の命で切腹させられるが、最期の最後に家康からも一笑を引き出すことに成功する。人の生きる理由としてあげられている「オモシロい」と思う気持ち、そしてそのような気持ち・感情を生み出すモノ・場所・人の連環を見出そうとすること、これこそが、嗜好品文化研究の目指すものではないだろうか。このことはあらためて強調しておきたい。

なお『へうげもの』最終話では、織部切腹後の数十年を経た後日譚が描かれるが、数寄は時代を超えて引き継がれていくという余韻溢れる完結を迎えている。人は死んでもモノは残る、モノが残らなくともモノを愛する心は死なない。人に喜びをもたらす嗜好品とそれを愛する文化もそうあってほしいのだが。

（了）

（付記）私にとって、嗜好品文化研究会は、昨今の人文社会科学では実現の難しい「オモシロさ」を探求することのできる稀有な場であり、フォーラムや研究会は気兼ねなく議論のできる大変居心地のよいサードプレイスでした。『嗜好品文化研究』が休刊となると聞いてとても寂しく感じておりますが、今後はいただいた愉しみの芽を伸ばしていける場を自身でも作っていければと考えております。今まで数々の機会をいただき、本当にありがとうございました。

【注】

- (1) モノ研究で用いられている物質性、マテリアリティという言葉について、日本語のニュアンスでは固いコンクリートや鉄のブロックのような硬質なイメージが喚起されるように思うが、必ずしもそこに限定されるものではなく、むしろ逆に脆弱性を抱えた人間の身体性という意味が込められていることも多い。
- (2) 本節では、現代人類学におけるモノ研究としてANTとジェルによるアート研究を取り上げたが、これらの研究にいたるモノ研究の新展開を導く前史として、アルジュン・アパデュライ (Appadurai 1986=2004) やダニエル・ミラー (Miller 1987, 1998, 2005) による研究を無視するわけにはいかない。かつてはマルクス主義的な物象化論にもとづき、モノはもっぱら交換価値を持つ商品として扱われ、そこではモノのマテリアルな実態は等閑視される傾向があった。これに対し、モノ=商品にとどまらない社会生活におけるモノの役割を提示したかれらのアプローチは、モノの新しい位相を描く多くの後続の研究群が生まれる重要な契機となった。
- (3) 近年は、他の生物など他種を人間社会の象徴や資源として見ることを超え、複数の種の間から世界や存在を記述するマルチスピーシーズ人類学が興隆をみせており、松茸をマツ類や菌など人間以外の存在から叙述する『マツタケ』(チン 2019) など自然を人間・社会と二項対立ではない形で記述する民族誌が生み出されている。
- (4) 杓形とは、茶碗の形状を指す言葉である。神官の履く杓(くつ)を連想させることによる。
- (5) 織部焼は、緑を基調とした青織部が有名だが、作風や釉薬など手法の違いによって、鉄分の強い素地の赤織部・鳴海織部、志野織部、歪みの強い織部黒・黒織部・伊賀織部などの種類がある(矢部 1998)。
- (6) オルデンバーグによるサードプレイス概念のもつ排除性については、女性の入りにくい店などを題材にした櫻井悟史による秀逸な書評(櫻井 2019)で論じられている。
- (7) アパデュライは現代のグローバリゼーションを、次元の異なる5つのスケープ(エスノスケープ/メディアスケープ/テクノスケープ/ファイナンススケープ/イデオスケープ)が漸次的に重なって展開していく過程ととらえている(アパデュライ 2004)。彼の議論では、グローバルな文化はそれぞれのレベルの視点に応じて、異なる仕方で構成されるものであると強調されており、嗜好品はそのような流動的なグローバル空間を描き出すための一つの視点になりうると思われる。
- (8) 男性雇用者と無業の妻から成る世帯(専業主婦世帯)数と雇用者の共働き世帯(共働き世帯)数の推移をみると、1997年以降一貫して後者が前者を上回っている(内閣府 2020)。
- (9) 世帯の可処分所得(収入から直接税・社会保険料を除いたもの。資産・現物給付を含まない)を世帯因数の平方根で割った値を等価可処分所得といい、等価可処分所得の中央値の半分の値を貧困線という。全世帯に対して貧困線を下回る所得しか得ていない世帯の割合を相対的貧困率とする。そして、子ども全体に占める、貧困線に満たない世帯にいる18

歳未満の子どもの割合を「子どもの貧困率」という。国民生活基礎調査によると、この「子どもの貧困率」は2015年13.9%となり、日本の子どもの7人に1人が貧困状態にあるとして注目された。このうち、2018年時点でも依然として13.5%、約7人に1人が貧困という状態は続いていた。

- (10) 藤原辰史は『縁食論』において、島根県奥出雲地方では、みなで休んだり話したりすることも含んだおやつ時間を「タバコ」と呼ぶことも紹介している(藤原 2020: 108-109)。
- (11) 同じ空間の共有そのものが縁食に含まれるのであれば、インターネットを介した他者との食事という点を縁食になぞらえることも可能かもしれない。コロナ禍のもとで2020年以降ZoomやLINEといったインターネットを介したビデオ通話システムでオンラインやリモートのチャットを行いながら飲食を楽しむ飲み会・お茶会が、新しい生活様式として行われている。もしかすると、誰でも途中参加・途中離脱可能なオンラインでの交流もまた、縁食の一環として、今後の人間どうしのつながりとして現れる可能性も考えられる。ただし、身体、そしてモノを共有しない環境で、こうした活動がどのような場・コミュニケーションになりうるのかは今後論じられるべき重要な研究テーマとなるだろう。
- (12) へうげものとは、安土桃山時代の博多の豪商・神屋宗湛による茶会記『宗湛日記』にて、1599年2月28日に古田織部に招かれた茶席で出された茶碗を「ウス茶ノ時ハ セト茶碗 ヒツミ(歪み) 候也 へウケモノ也」と評したことによる(矢部 1998)。

【参考文献】

- 阿部彩、村山伸子、可知悠子、鳥咲子編、2018、『子どもの貧困と食格差——お腹いっぱい食べさせたい』大月書店。
- Appadurai, Arjun, 1986, *The Social Life of Things: Commodities in cultural perspective*, Cambridge University Press.
- アパデュライ、アルジュン、2004(門田健一訳)『さまざまよえる近代——グローバル化の文化研究』平凡社。(Appadurai, Arjun, 1996, *Modernity at Large: Cultural Dimensions of Globalization*, Minnesota Press.)
- カロン、ミシェル、2006(川床靖子訳)「参加型デザインにおけるハイブリッドな共同体と社会・技術的アレンジメントの役割」上野直樹・土橋臣吾編『科学技術実践のフィールドワーク ハイブリッドのデザイン』せりか書房pp.38-54。
- チン、アナ、2019(赤嶺淳訳)『マツタケ——不確定な時代を生きる術』みすず書房。(Tsing, Anna Lowenhaupt, 2015, *The Mushroom at the End of the World*, Princeton University Press.)
- 藤原辰史、2020、『縁食論——孤食と共食のあいだ』ミシマ社。
- 藤本憲一、2008、「ケータイ」『嗜好品文化を学ぶ人のために』世界思想社pp.126-129。
- 、2019、「小確幸」文学から、「食の起源」まで」『嗜好品文化研究』5: 110-116。
- ギギ、ファビオ、2011、「行為者としての「モノ」——エージェンシーの概念の拡張に関する一考察」『同

志社社会学研究』15: 1-2.

Gell, Alfred, 1998, *Art and Agency: An Anthropological Theory*, Clarendon Press.

本柳亨、2015、「ファストフード店の利用者に関する考察——サードプレイスを目的とした利用者の分析を中心に」『学習院女子大学紀要』17: 163-176.

——、2018、「サードプレイスを目的とした飲食店の利用を規定する要因」『立正経営論集』1: 97-114.

井野瀬久美恵、2020、「今、「嗜好品の世界史」を書くということ（上）」『嗜好品文化研究』5: 55-65.

——、2021、「今、「嗜好品の世界史」を書くということ（下）」『嗜好品文化研究』6: 63-72.

小林章夫、2000、『コーヒー・ハウス——18世紀ロンドン、都市の生活史』講談社。

小林重人、山田広明、2014、「マイブレイス志向と交流志向が共存するサードプレイス形成モデルの研究：石川県能美市の非常設型「ひよっこりカフェ」を事例として」『地域活性研究』5: 3-12.

——、2015、「サードプレイスにおける経験がもたらす地域愛着と協力以降の形成」『地域活性研究』6: 1-10.

桑田忠親著、矢部誠一郎監修、2010、『へうげもの 古田織部伝——教書の天下を獲った武将』ダイヤモンド社。

モラスキー、マイク、2014、『日本の居酒屋文化——赤提灯の魅力を探る』光文社。

Miller, Daniel, 1987, *Material Culture and Mass Consumption*, Blackwell.

Miller, Daniel (ed.), 1998, *Material Cultures: Why Some Things Matter*, University of Chicago Press.

——、2005, *Materiality*, Duke University Press.

内閣府、2020、『男女共同参画白書 令和2年版』。

中野忠、2007、「王政復古期以後のロンドンにおける市民的社交圏——コーヒーハウスをめぐる最近の研究から」『早稲田社会科学総合研究』7(3): 39-61.

オルデンバーグ、レイ、2013（忠平美幸訳）『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地のよい場所」みずず書房。（Ray, Oldenburg, 1989, *The Great Good Place: Cafes, Coffee Shops, Community Centers, Beauty Parlors, General Stores, Bars, Hangouts, and How They Get You Through the Day*, New York: Paragon House.）

バットナム、ロバート・D、2006（柴内康文訳）『孤独なボウリング—米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房。（Robert David Putnam, 2000, *Bowling Alone: The Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster.）

櫻井悟史、2019、「(書評)「レイ・オルデンバーグ『サードプレイス——コミュニティの核になる「とびきり居心地よい場所」』」、「(書評) マイク・モラスキー『日本の居酒屋文化——赤提灯の魅力を探る』」安井大輔編、2019、『フードスタディーズ・ガイドブック』ナカニシヤ出版pp.225-236.

シヴェルブシュ、1988（福本義憲訳）『楽園・味覚・理性——嗜好品の歴史』法政大学出版局。

ラトゥール、ブリュノ、2019（伊藤嘉高訳）『社会的なものを組み直す——アクターネットワーク理論入門』法政大学出版局。

高田公理・嗜好品文化研究会編、2008、『嗜好品文化を学ぶ人のために』世界思想社。

床呂郁哉・河合香史編、2011、『ものの人類学』京都大学学術出版会。

——、2019、『ものの人類学2』京都大学学術出版会。

角山栄、2017、『茶の世界史 改版——緑茶の文化と紅茶の社会』中央公論新社。

白井隆一郎、1992、『コーヒーが廻り世界史が廻る——近代市民社会の黒い血液』中央公論新社。

矢部良明監修、1998、『カラー版 日本やきもの史』美術出版社。

山田広明、小林重人、2016、「個人志向と社会志向が共存するサードプレイス形成メカニズムの研究」『情報処理学会論文誌』57(3): 897-909.

山田芳裕、2005-2018、『へうげもの』（全25巻）講談社。

吉田憲司、2017、「文明の転換点における人類学と博物館——民博の開館40周年にあたって考える」『民博通信』158: 4-9.

吉田直希、2008、「コーヒーハウスの権力論——18世紀イギリス公共圏と小説の誕生」『小樽商科大学人文研究』115: 259-272.

安井 大輔／やすい だいすけ●大阪府生まれ。京都大学経済学部卒業 京都大学大学院文学研究科博士後期課程研究指導認定退学。博士（文学）。現在、立命館大学食マネジメント学部・研究科准教授。専門は、社会学とフードスタディーズ。2010年度嗜好品文化研究会研究奨励事業・助成研究者。論文に「食嗜好と移民のアイデンティティ——エスニシティ・グローバリティ・ローカリティの交錯」『嗜好品文化研究』第3号（2018）、編著に『フードスタディーズ・ガイドブック』（ナカニシヤ出版 2019）などがある。